

基幹共同研究 2 地域統合情報発信の開発

只見町インターネット・エコミュージアムの可能性

—「民具」の国際標準化に焦点をあてて—

佐野賢治 木下宏揚
フレデリック・ルシーニュ 小松大介
佐藤俊輔 鈴木一弘 松澤和光
SANO Kenji KINOSHITA Hirotsugu
LESIGNE Frederic KOMATSU Daisuke
SATO Shunsuke SUZUKI Kazuhiro
MATSUZAWA Kazumitsu

はじめに

基幹共同研究、地域統合情報発信班は、21世紀COEプログラム事業を継承し、只見町の人々の協力のもとに、双方で連携を取りながら只見町インターネット・エコミュージアム（以下略称T.I.E.M.として表記）のコンテンツの内容充実とその発信法を、①只見町の俯瞰写真 ②自然と暮らし ③只見町の屋根葺職人 ④只見町所蔵民具検索 の4分野に分けて進めてきた。民具を中心に生業から年中行事まで、実際、地元の古老の皆さまの協力のもと、その盛時を再現して高精細映像で撮りためた資料の活用や、ウェブ上での特別展ともいえる屋根葺職人に続く個別テーマの番組化、民具のクロス検索のシステム開発など今後取り組むべき課題はさまざま残されているが、インターネット・エコミュージアムの枠組みを示すという第一段階は曲がりなりにも提示しえたといえる。

その一方、豊かな自然と民俗文化を有する只見の地も少子高齢化の波に洗われ、民具を制作・使用した住民自身が収集し、整理し、記録カードに書き込む只見方式として民具学界で知られる民具の整理・記録・保存運動に従事した古老たちもその多くが鬼籍に入られた。「孫に伝える」ということがその活動のモチベーションになっていたが、その子供たちの声も村里では聞えなくなっている。このような地域社会、ムラの現状の中で、われわれの目指しているインターネット・エコミュージアムのシステム開発を進める意義と可能性を再度、確認しておく必要がある。

今後、T.I.E.M.を更新、持続していくためには、地元只見町の人々と我々調査・研究する側との関係性の中で、それぞれがT.I.E.M.の主体であるとの自覚のもとに、両者の連携、共有の視点をさらに発展させていくための論議が必要である。具体的には、T.I.E.M.の内容構成や画面表示から運営法まで相互で随時に話し合い、映像の上映会を開催し町の人々に意見を聴く機会を折にふれ持つことなどが考えられる。われわれはプロジェクト開始の当初から只見方式に学び、調査する一される、映像を撮る一撮られる、資料を分析する一されるなど、無意識のうちに研究者サイドに陥ることのないよう

に留意してきた。そのためには、T.I.E.M.のバーチャルな画面上ではなく、民具の実物資料を展示した博物館的な施設での交流、地元住民と外部の研究者が集える場も必要となる。

また、少子高齢化、世代交代の中で、民具も考古学遺物と同様に地元でもその製作・使用法がわからなくなってきた。民具は、地域の風土条件の中で人々が制作、使用してきたため強いローカル性を示し、その全国的な共通名称、ナショナルレベルの標準名さえ民具学界では待望されながらも設定できずに今日に至っている。「民具」は日本で生まれた学術用語であるが、この地球上において大多数を占める文献記録を残さなかった地域、階層の人々の生活文化を解明するのに有形の物質文化であるだけに第一級の基本資料といえる。しかし、学術資料化の大前提になる学名1つとっても、それぞれの土地の住民の自然観や世界観が反映し、時代性、階層性、民族性などの属性も加わり、さらに近代化の中での位置づけも問われ、グローバルな共通名称の設定にはさらにさまざまな課題が立ち上がる。そのためには、鍬が耕起具であることが全く分からない幼稚園児でも、画像検索からその民具の名称、使用法など基本的なデータが分かるシステムを情報工学方面の助けを借りて作り上げる必要性がある。

この研究班では、只見の民具を事例にして国際的な *mingu* 検索の指標となるようなシステム開発のモデルを提示したいと考える。小さな函、パソコンの画面がローカル・ナショナル・グローバルな世界への扉となるのである。

I 三つのミュージアム

1 只見町のミュージアム

現在、只見町には、「ただみ・ブナと川のミュージアム」（自然資料、上町）のほか、只見考古館（考古遺物、大倉集落）、河合継之助記念館（歴史資料、塩沢）、叶津番所（豪農民家建築、叶津）などそれぞれの分野の博物館的施設がある。人口5千人弱の町としてはハード面、箱物としては恵まれた現況といえるが、国指定有形民俗文化財も含む民具類は旧朝日町公民館（黒谷）に收藏され、整理・保管されてはいるものの、民俗資料を専門に展示公開する施設は今のところない。しかし、2010年秋、町議会は旧只見中学校の校舎を活用して民俗博物館として再建することを決議した。いわゆる平成の大合併も一因し、全国的に、博物館・資料館の運営維持の厳しさが指摘されている。その中で、只見町の決断は評価されるが、それだけに時代に即応した館建設の意味付け、理念が求められることになる。少子・高齢化は民俗文化の「伝承」に依拠してきた民俗学にとってその影響は多大である。総務省によると3,229市町村（1999.4.1現在）は1,727（2010.3.31現在）と約半減し、行政上の村は、568から184と三分の一以上に減じた。国土交通省がまとめた過疎地域を抱える全国775市町村に対して、その管内に所在する62,273集落の状況調査（2006年）によると、65歳以上の高齢者が人口の半数以上を占める高齢化集落が7,878集落（12.7%）報告されている。高齢化集落は、集落自治から生活道路の管理、冠婚葬祭まで、共同体としての機能が維持できない、いわゆる「限界集落」である。只見町の2010年の高齢化率は41.4%（国平均23.1%）、高齢化集落のライン上にある集落が5つほどある。統計上は分かっているが、どこの集落が該当するのかは町の職員も言いにくい雰囲気である。

民俗資料館として再整備される旧只見中学校は、只見町の中心に位置し、「ただみ・ブナと川のミュージアム」に隣接しており、川漁の民具の現物を、只見川を真近にして参照でき、また川漁の実際を近くの古老からも聞け、使用可能な民具を用いての実物体験なども試みることができる好条件の立地である。旧中学校には現在、国指定民具をはじめとする民具記録カード類が収められているが、小・中学校は地域社会の人々にとっては自身の卒業した母校でもあり、故郷のイメージは学舎に重なって想起される。廃校舎を再活用し、民具展示を核にした民俗資料館は、過去（先祖）—現在（我々）—未来（子孫）の認識を再確認する場ともなる。

先にも述べたが、市町村合併は財政的に箱物としての複数の博物館・資料館の維持を困難にし、統廃合が検討され、民具資料に限っていえば複数の同一資料は代表的なものを残し廃棄処分の対象になるなど危機的な状況が全国各地から報告されている。従来、市町村の民具資料は多くの場合、公的な施設がある場合はそこに、ない場合は廃校舎の空き教室などに收藏、保存されてきたが、ここに来てその施設、民具自体の存在が脅かされてきている。いずれにしろ、先人が苦勞して収集した常民の歴史を描くための非文字資料ともいえる民具が、展示資料や学術資料として日の目を見ることなく省みられなくなっている現状は嘆かわしい。このような中で、只見町の民具は住民自身の手によって整理・記録・保存され、郷土を再認識する資料として位置づけられ收藏されてきた。その上、T.I.E.M. プロジェクトにおいて、民具そのものとそれを製作・使用した古老の記憶を記した一点一点のカードは優れた学術研究資料としてウェブ上で公開されるようになった。それに加えて、実物の民具を展示公開する民俗資料館、博物館的施設がこのたび、只見中学校の旧校舎を改築して設立されることになったのである。

2 只見の自然とエコミュージアム

T.I.E.M. では、只見の自然と人の交渉は、4分野の内の「②自然と暮らし」のコーナーで、民具を介在させ、自然—(民具)—人の関係性の中で構成していく方針であるが、民具の製作・使用法について語れる古老が少なくなる一方、只見の自然界は、ブナの原生林はじめ、アバランチシュート（なだれ地形）、ユピソ柳の群生など世界的にも誇れる多くの珍しい動植物の生態や自然景観など、豊かな自然を眼前に示してくれている。

そのような自然環境をふまえ、町では「自然首都・只見」を2007年7月27日、宣言、ふるさとの自然を改めて見直し、そのすばらしさと恵みに感謝し、次世代に継承する努力を町民にアピールし、その具体的運動としてユネスコの「エコパーク（生物圏保存地域）」認証を現在、只見町ブナセンターを活動拠点として目指している。エコパークに登録されると、原生的な自然を厳重に保護する「核心地域」、教育や学術研究で活用する「緩衝地帯」、人が生活や経済活動ができる「移行地域」の3地域に区分され、人間と自然との共生がはかられる。この動きに連動して、町では従来の「川の歴史博物館」を、ブナを中心とした只見の自然景観を展示で再現し、「ただみ・ブナと川のミュージアム」として2009年10月3日リニューアル開館した。

ブナ林の景観保全を志向するブナセンターや民具を語る会の活動はまさに住民主体の地域認識・振興運動であるエコミュージアムの理念に重なる。エコミュージアムは、1960年代にフランスのG・H・リヴィエールが提唱した住民主体の新たな地域博物館運動といえるが、日本エコミュージアム研

究会（会長：大原一興横浜国立大学教授）では、2009年の総会で日本のエコミュージアムは、「地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである」と定義、「多様な自然環境とそこにおいて成立した有形無形の生活・文化・産業の遺産や記憶・様式等を、過去・現在・未来を通じて、総合的・統合的」に対象とするものとし、地域資源を学習、調査・研究、保全・利活用する機能を前提として、「(学校) — 地域を学び知り、地域をつくる担い手を育む住民の学校として、交流、教育、展示普及、(研究所) — 地域のための研究所として、専門家と共に科学性をふまえ学際的な調査・研究、(保全機関) — 多様な自然や生活文化を含む地域資源の保全機関として、記憶の収集および持続的利活用」する活動を行い、それを推進するしくみとして「専門的職員を配し、地域の各分野や利用者の参加による企画運営、専門家との連携による学術的研究についての組織」を構成するものと憲章化した。

只見方式の民具保存活動から「自然首都・只見」運動まで、只見町の住民と行政当局の自然と文化に対する一体的な取り組みは、まさにエコミュージアムが目的とするところに合致する。町では「自然首都・只見」応援基金をふるさと納税の対象とし、キータームに、「1. 豊かな自然の代表である世界遺産級のブナの原生林、2. 全ての生命の源である豊富な水を生み出す雪、3. まちづくりの根幹となる郷土を愛する人」を掲げ、その使途を「1. ブナを核とした、2. 雪と共存する、3. 次世代を担う子どもたちの教育充実」のまちづくりに関する事業に充てるとした。

地域の担い手の養成については、地域資源全てを学習対象として自然や民具学習の博学連携、町民向けの「只見学」を推進、スケールの大きな自然環境の中での生活を通じた人格形成を目指すことを明言し、具体的には存続の問われる県立只見高校の継続運動に力を入れている。神奈川大学はささやかではあるが日本常民文化研究所が「只見常民大学」を開講、非文字資料研究センターが研究面で協力し、法学部自治行政学科は只見高校からの推薦枠を設け、町づくりの人材育成に協力する協定を結んでいる。地域社会と大学の連携の一つのあり方といえる。

このような只見町のエコミュージアムの活動も含めると、只見町には、それぞれの性格を示しながら、相互に関係する、aミュージアム bエコミュージアム cインターネット・エコミュージアムの三つのミュージアム形成の基盤が整備されたといえ、その関係性が問われることになる。

3 インターネット・エコミュージアム

パソコンのウェブ上で展開するインターネット・エコミュージアムの可能性はさまざまである。例えば、腕の立つ元山（杣）の大鋸おおがの高精細カメラ映像を利用した使用痕の分析から、聞き書きでは分らない、カンとかコツといった民俗技術の解明の糸口が見いだせるかもしれないし、民具の製作法や使用法については知ってはいても、パソコンの扱いには全く不慣れなと祖父母と情報機器（IT）にはめっぽう強い現代っ子である孫との世代間交流を図る契機になるかもしれない。古地図や聞き書きによる歴史的資料とGIS.GPSなどの空間・地理情報を組み合わせることによって、鉄砲打ちとクマとの知恵比べを積雪量・風向き・地形・栃の実の作況などの要素をクロスさせて可視化することや、雪崩・洪水など自然災害の予知、ハザードマップとして役立てることもできるだろう。その折に、只見の地質、動植物、気候などの自然条件から民具はもとより年中行事や人の一生などの民俗文化まで網羅し、編集された『只見町史』全16巻は地域情報の優れたインデックスとなる。町史の目次を検

索エンジンとして T.I.E.M. にたくみに取り入れることも考えなければならない。話が民具からそれるが、将来的に日本各地の市町村史、及びその膨大な編纂資料を地域情報としてデータベース化し、それを互いに参照するシステムが開発されれば人文社会科学界はむろんのことさまざまな分野に寄与することになる。

しかし、何よりもインターネットの特質は、さまざまな情報を、地域を超えて、それも瞬時に世界中の人々に伝えることができ、またその逆に関心ある情報にアクセスできる双方向性にある。民具は、ふつうの人々が日々生業を営み、生活するための必要上から作られ使われてきた有形の民俗文化である。国際的な比較のためには、共通名称の設定が望まれるが、強いローカル性を有する民具には様々な地方名称があり、一筋縄ではいかない。そこで、サムネイルなどを活用して図像からの検索法なども加味し、名称については検索タグとして第一段階としては操作的な性格から考えていくのが現実的である。相互交流型のブログなどを通して、只見町と類似した、世界の様々な地域の山村生活を有形の物質文化である民具の比較からみることは、最も分かりやすい形で自己の郷土の特徴を知ることにもなる。

さらに、インターネット・エコミュージアムには、大面積の展示スペースや収蔵庫は不要であり、データの集積は無限といってもよく、その分類・検索機能はさまざまに工夫できる。今後、地域社会において博物館的施設、箱物としてのミュージアムの維持、運営が厳しくなる中で、地域の民具資料はエコミュージアム、インターネット・エコミュージアムの視点も加えた方向性で扱われる必要がある。

4 三つのミュージアム

三つのミュージアムは、その性格、形態からそれぞれ別物と考えられる一方、一つの館がコア・ミュージアム（中核博物館）として三つのミュージアムの機能・役割をすべて担うとも考えられる。ここではその性格・目的・関係者を指標として a ミュージアム b エコミュージアム c インターネット・エコミュージアム の相互関係を簡潔に整理してみる。

a ミュージアム 〈施設における実物展示・保存〉—〈展示・保存（保全機関的）〉—〈特定できる参観者〉

b エコミュージアム 〈住民主体の地域認識・振興運動〉—〈教育（学校的）〉—〈地域の住民〉

c インターネット・エコミュージアム 〈地域情報のデータベース・公開〉—〈研究（研究所的）〉—〈不特定な多数の訪問・アクセス者〉

その他さまざまな視点、要素から三つのミュージアムの特徴を把握することができるが今後の課題とすることにして、よそ者であるわれわれ研究者が地域の三つのミュージアムの中で多く関与できるのは、その性格が研究所的な c インターネット・エコミュージアムといえる。物質文化研究としての民具研究の課題や方法論の共有化をインターネットを通して地元の方々や世界中の関心を持つ人々と協力してそのモデルとして構築することが T.I.E.M. の目標となる。

全世界と瞬時に結ばれ、大容量のデータを記憶し、検索すれば直ちに望むデータが引き出せる小さな箱物・パソコン上のインターネット・エコミュージアムは、なりは小さくても、ただ、そこに現れているものが実物ではないということを除けば、巨大な建物の博物館に引けをとらない博物館なのである。

（佐野賢治）

参考文献

- 新井重三 『実践エコミュージアム入門——21世紀のまちおこし』1995 牧野出版
- 佐野賢治 「三つのミュージアム——“ムラ”の後退と只見町インターネット・エコミュージアムの意義——」『非文字資料研究』25 2011
- 佐野賢治 「グローバリゼーションと柳田民俗学——郷土研究から世界常民学へ——」『神奈川大学評論』66 2010

II 只見町インターネット・エコミュージアムの理念と展開

はじめに

只見町インターネット・エコミュージアム (Tadami Internet Eco-Museum, 略して T.I.E.M.) の研究プロジェクトは、福島県只見町の民具を中心にその地域の物質文化と非物質文化を総合的にインターネット上で公開することを目的とし、2003年度に開始した神奈川大学 COE プログラムの第4班・地域統合情報発信班が開発した同名のウェブサイト(「只見町インターネット・エコミュージアム」= T.I.E.M.) の構築計画である。この第4班は、委託業者であるコンテンツ株式会社にウェブ上の技術的工作・映像撮影・「只見町の風景」部門構築を委託した上で、T.I.E.M. サイトに掲示すべき資料の選択・デジタル化・展示方法の決定など、一連の作業を担当した。T.I.E.M. 計画は①只見町役場と住民の立場、②民俗文化の領域においてインターネット・コンテンツの先端技術を開発したコンテンツ株式会社の立場、③神奈川大学 COE プログラム第4班の教授や研究協力者の立場という、三つの相補的な視点の協力の下に進められた。

2006年度から本格的に可動し始めた T.I.E.M. サイトは現在、「只見町の風景」「只見町の屋根葺職人」「自然と暮らし」「只見町所蔵民具検索」の四つの部門から構成されている。「只見町の風景」では只見の民俗に空間的に接触することができ、「自然と暮らし」では只見の生業を一年間のサイクルを通して時間的に親しむことができる。「只見町の屋根葺職人」は一種の企画展である。「只見町所蔵民具検索」では民具カードのデータベースを展示している。

なお、T.I.E.M. サイトは今述べたように、空間・時間・企画展・データベースという四つの何れを選んでも只見町の文化にアプローチできるような構成となっているが、その核心が民具のコレクションである。「自然と暮らし」部門で紹介される主要民具はすべて「只見町所蔵民具検索」と関連付けられており、「只見町の風景」と「只見町の屋根葺職人」に掲示されている民具も「只見町所蔵民具検索」のデータベースとリンクされており、只見町の民具を中心に四つの部門の有機的な関連性が用意されている。

「自然と暮らし」部門は、その内容の詳しい紹介を小松大介の報告書にゆずるが、「作業工程表」の再構成に手間取ったため、2008年度3月に COE プログラムが完了した時点では臨時的な形で公開されるにとどまった。この最後の部門の作業は非文字資料研究センターに引き継がれ、ようやく2009年度末(2010年3月)に完成した。

当初から T.I.E.M. サイトはプロトタイプとして企画されたものである。目指したのは完璧な博物館ではなくて、改良可能な「生きている」エコミュージアムのプロトタイプであった。したがって、最も力を入れた作業は、民具カードなど一次資料のデータ化作業の傍ら、理念の基盤を固める努力であ

った。4年間をかけてなし遂げられた研究計画の進捗速度は決して早いとは言えないが、只見の資料に基づいた総合的な地域文化情報発信の展示方法にこだわっただけに、一次資料を中心にした世界初のインターネット・エコミュージアムのプロトタイプを構築しえたといえる。そして、次の段階の展開を可能にする理念は未熟ながらも一応用意されている。したがってT.I.E.M.サイトはまだプロトタイプに過ぎないが、独自の展示物のコレクションを所有しており、博物館学的な理念の上に設計されている。

この博物館的理念の紹介はこの報告の趣旨であるが、そのために先ずこの博物館の三つの特徴を整理しておきたい。展示資料自体が古くても展示形態的には新しいメディアとしての「只見町インターネット・エコミュージアム」は以下の三つの特徴をもっている。

- ①民具を扱う博物館
- ②エコミュージアムとしての博物館
- ③ウェブ上の博物館

他方、理念を「ビジョン」の意も含んだ言葉として理解すれば、このプロトタイプのためにどのような長期的なビジョンが必要だろうか、またどのような将来性がありうるか、という課題も考えなければならぬ。これ以降のT.I.E.M.計画は二つの異なる方向へ平行して発展していけると思われる。一つは研究者向けの研究方向であり、これは民具名・民具形態などを比較するための民具データベースの発展やそれにかかわる情報発信の方法改良という課題である。もう一つはエコミュージアムというコンセプトを基にその内容を充実させる方向である。この報告書では専ら後者の発展方向の可能性と有意性に焦点を絞ることにしたい。

なぜならば、ネット上のエコミュージアムの役目は、研究者（民具研究、民俗学、文化人類学、農業学など）にかぎらず、主に地域社会の住民のために務めるべきと言えるからである。学校の授業で地域伝統文化を教えるための材料として使われることは勿論期待できるが、「エコミュージアム」となっているからには、その運営維持と発展自体がそもそも地元の住民の手によって進められるべきであり、また根本的に地元の大人でも自分の地域文化を考えるためにこの博物館内の情報が一種の参考資料になることを前提にしなければならない。いわゆる「住民主体」の理念＝ビジョンである。「住民主体」という基本的なビジョンに関しては第4班の全員が共有していた考え方である。

この報告では只見町の民俗や民具の内容にはふれないことにして、T.I.E.M.サイトの上述した三つの特徴を順番に論じ、この班が設定した博物館の理念・ビジョンを述べることにする。

1節ではこのサイトを、地元の人でも参考にできるような地域伝統文化の総合的な博物館までに成長させるためには「民具の博物館」だけでなく「民具を中心にした地域社会全般の博物館」という方針を定める必要があるという趣旨を述べる。そもそも「民具」という用語の中に技術と社会の両側面が含まれているから、民具を扱う博物館なら自然と社会全般に関する情報も付帯してくる。したがって「民具」という概念の可能性をもっと活かす意義がある。民具の概念に関しては、すでに沢山の論考があるが、ここで私自身の只見町調査の経験を踏まえてその概念の有効性を検討したい。

2節では、エコミュージアムとしてのサイトの特徴を説明する。「只見方式」の方法を継承しながら、民具カードに記録された情報を活かせば、後述するリビエール氏が考えていたような「生きている」エコミュージアムの望ましい発展を築いていくことが出来る。ネット上の博物館の特徴を説明

する3節では、この画期的なインターネット・エコミュージアムを通して全世界と交流することの意義を強調する。

さらに只見町の文化の特徴（例えば「雪への対応」）をテーマにして他の地域と比較できるような企画展示など設けたら、世界と只見を考える「民具を中心にした地域社会の博物館」に発展する可能性もあり、そこまでサイトを発展させる意義は大きいと思われる。

1 民具の博物館

• 民具と技術システム

民俗学では「道具」というタームよりも「民具」という学術用語を使用しているのは、道具使用者＝文化伝承者の存在を強調するためであると言われている。筆者は只見町に調査に赴いて始めてそれを認識するようになった。なぜならば、只見町では何百年、何千年にもわたって代々に伝わった道具の使用方法やそれに関わる農業知識全般や口頭伝承や色々な感情が、それら道具の中に潜入しているからである。只見ダム工事をきっかけに住民たちが民具を収集し記録する運動を始めた、という話を聞いて実に驚いた。

只見町には「只見町の民具を語る会」のほかに「民具と語る会」の協会が存在していることは注目すべきである。つまり、「民」を「一般の人々」という意味で理解すれば、「民具」は技術史の研究対象のみならず、社会科学の研究対象としての社会全般を語る「語り部」になりえるという認識が地元ですでに広く共有されているといえる。

「道具」概念と比べて、民具の社会的な性格が明確になる。「道具」は、農具や職人用の道具のイメージが強く、専門的なモノに使う傾向があるが、「民具」は一般の人々の身近にある一般のモノのすべてが含まれている。たとえば、照明の用具も民具のカテゴリーの中に入れることが可能である。いいかえれば、「道具」と言えば、視点が技術におかれているが、「民具」の場合は、視点が使い手の用途やニーズの方におかれることになる。民具を通して背景の文化や社会の諸要素がみえてくるから、文化・社会の様態を教えてくれる大切な資料となっている。このように「民具」の概念はヒトとモノの接点として設定されているから、この概念の使用によって、技術のみならず、文化・社会への関心も自然に導入される有効性がある。

ただ文化全般や社会全般といえば、対象が捉えにくいものになる恐れがあるため、筆者は民具との関連性を強く暗示するために「技術システム」という用語の採用を提案したい。「技術システム」の意味するところは、民具の使用方法や製作はもちろんのこと、自然環境への対応など技術全般の側面のみならず、民具の用途にかかわる暮らしの諸要素（生活様式、社会構成など）もそのシステムの中に含まれている総体として考えたい。物質文化のみならず非物質文化の要素も含めた技術システムの中に民具を位置づけて研究していく意義はあるだろう。

ここで只見町の技術システムを議論するつもりはないが、少なくともその豊富さと複雑さを認めなければならぬ。筆者自身も只見町の民具の多様性とその技術の高水準に圧倒された。したがって、もちろんハイテク（high-tech）ではないが、ローテク（low-tech）とは相応しい表現ではないように思う。ファーストフード（fast-food）の反対語としてスローフード（slow-food）の言葉が肯定的なニュアンスをもって現在定着したように、肯定的な意味でのスローテク（slow-tech）と形容したいので

ある。

根本的な技術上の特徴を求めるならば、グローバル化を誘導するハイテクのデジタル式技術と只見のようなローカルなアナログ式技術の相違をまず認めておくことに留めたい。例えば、携帯電話と鋏の相違点をそのグローバルなデジタル式技術とローカルなアナログ式技術の対立の視点で考えた場合、技術水準の優劣の基準でいうならば、もちろん携帯の方が優越しており、携帯の機能の数の方がはるかに鋏のそれを超えている（ユーザーが携帯の機能を使いこなせるか非かの問題を別にして）。ただ、鋏の使用法や製作法にかかわる情報が長期的に伝承されてきたため、個人の経験のほかに、歳月を経て蓄積されてきた農業・自然環境・社会要素などの数々の情報がその鋏の「なか」に記憶されている。それによって、情報の数という基準で比較すれば、鋏の方が優れていると認めなければならない。

この例が明らかに示すように、モノを考えるために技術水準の優劣という基準自体はあまり意味がなく、情報の数と多様性という基準の方が、ヒトにとってのモノのリアリティー（reality 現実感）をより誠実に表しているといえる。したがって、民具のエコミュージアムとしては、情報の数＝豊富さから見たモノのリアリティーをどのような展示方法で示すべきかは当初からの研究課題であった。「第三節 インターネット上の博物館」で詳細に述べるが、デジタル式技術とアナログ式技術の相違点を意識しながら、3D映像などのバーチャル・リアリティー（virtual reality 仮想現実）の展示方法をさけて、様々な資料・情報を交差した形の展示方法を工夫してみたのが、ヒトにとってのモノのリアリティーを誠実に示すための一つの方策であった。

ただ、このような工夫は未だ初歩的であり、これからも民具のリアリティーをより効率的に示すような展示方法を開発するべきであろう。そのために博物館論が必要であるが、前提条件として暮らしの経験を教えてくれる住民の継続的な参加が不可欠ということである。この点については「2 エコミュージアムとしての博物館」の説明にゆずりたい。

●識字率の水準と「只見方式」の民具記録

只見町の年配の方々からお話を伺った時に最初にうけた印象は、識字率が高いことと、農業法などの近代的技術も含めて、広い意味でいう学問に対する熱心さが強いということであった。民具や技術について長時間の聞き取り調査を行っても、男女の性別とはほとんど関係なく、いつも暖かく対応してくださった住民の方々の態度の基礎には学問・勉強に対する強い関心があったように感じた。

実際、佐野賢治先生ゼミの大学院生による民俗調査団による民俗誌『大倉の民俗——主福島県南会津郡只見町大倉——』（神奈川大学歴民調査報告第6集 2008年3月刊）のために只見町の教育について簡単な報告を執筆したが、戦後の只見町に多くの農家の子供たちのために高等学校や大学へ進学するチャンスを与える社会を作っていこうという地域あげでの努力があったという聞き取りを得た。このことからこの地域での教育や学問への熱意を垣間みることができる。

その「勉強熱心さ」の精神は何に依るかは正確に分からない。只見町の自然環境の厳しさには一つの要因があると推測している。つまり、この環境下では勉強から得る知恵を持っていなければ生きられないという事情がまず挙げられる。話者から聞いた話によると、戦後の貧しい只見町の子供たちにとって、勉強に励んで出世したら早く只見から出られるという願望も働いたようである。只見町に限

らないことである、もう一つの重要な理由として、明治時代から始まった近代化の過程の中で、近代的な教育の普及が識字率の向上に影響を与えたことである。

ただ只見町のような山間地域の場合、注目すべき事情がある。只見町の伝統的な生活様式は田子倉ダムが竣工された高度経済成長期（昭和20年代・30年代）まで維持された。根本的な生活様式の近代化はそれ以降始まり、前近代的な民俗文化が割と最近まで継承された。しかし高度成長期には、近代教育が普及し始めた明治中期からすでに長い年月が経っており、識字率がすでに高かった。只見町の近代化のこの特殊なタイミングによって、「民俗文化」・「伝統社会」の消滅の危機にあった時、前近代的な民俗文化を経験した住民がまだ町内に多数健在であったと同時に、只見町の住民が自分で民具を収集・記録することを可能にする言語的能力をも十分に身につけていたのである。

こうした事情を考えると、現在、国指定重要文化財として広く知られるようになった只見町の民具は気候的に厳しい冬、地理的に深い山という特殊な自然環境から何百年・何千年もかけて育んできたが、これに加えて、近代化によって培われた識字率向上や学問普及の過程の中で、19世紀末から1960年代までの「伝統社会」（徐々に近代化・欧米化しつつあったが）を経験し記憶している話者が大勢健在であったという、民俗学にとってきわめて貴重な状況が只見町にあった。であるからこそ、「只見方式」による民具収集・整理・記録の偉業が達成できたといえる。

長い人類の歴史のなかで、このような状況を可能にした伝統的な民具の網羅的な収集・記録の成果は他の地域・国や時代にはそれほど多くはないように思われる。

• 画期的な民具のインターネット・エコミュージアム

上述した好条件に恵まれて、T.I.E.M.計画は住民の民具記録運動の延長線に立ち、民具を扱うインターネット・エコミュージアムを構築するプロジェクトを立ち上げた。ある地域の民具の網羅的なコレクションを紹介できる博物館はそもそも珍しいが、T.I.E.M.サイトは民具の網羅的なコレクションを所有しているだけでなく、地元の住民が「只見方式」で記録した一次資料としての民具カードや作業工程表を展示している。

そのため、T.I.E.M.サイトはただ既成のエコミュージアムのPR用ホームページのようなものではなく、民具カードや作業工程表という一次資料展示物コレクションを所有するインターネット上の独自のエコミュージアムとなっている。その意味でユニークな博物館であり、一次資料という基準で区別すれば、もしかして世界初の「インターネット・エコミュージアム」の例であるかもしれない。研究者にとって民具カードや作業工程表などの一次資料は大変貴重な資料であることを特記する価値がある。

そして、T.I.E.M.サイトがプロトタイプとして完成された今こそ原点にもどって、このサイトの運営と発展を「只見方式」の開発者＝只見の住民の手元に返すべきことを強調せずにはいられない。ただ、今後は、民具の収集・整理・記録の作業ではなく、ミュージアムの経営・発展という段階となるため、別個に博物館論が必要になる。この点について、エコミュージアムの有意性を検討する次の章で自分なりの考察を述べたい。

2 エコミュージアムとしての博物館

• エコミュージアムの概念

エコミュージアムは1960年代にフランス人のジョルジュ＝アンリ・リビエール（Georges-Henri Rivière 1897-1985）によって発想され提唱された博物館の概念である。フランス語ではエコミュゼ（écomusée）と言うが、日本で「エコミュージアム」というネーミングで親しまれている。「ミュージアム」（ミュゼ）はもちろん博物館のことであるが、その前の「エコ」が肝心である。環境の意となっている「エコ」にちなんだエコミュージアムのアプローチには自然生態学と社会科学との両方の方法や視点を含んでおり、日常的な営みのなかで人間が自然環境や社会環境とどのような関係をもっているかという課題を基本にしている。只見町インターネット・エコミュージアムの基本方針もこれと同じで、ウェブ上の博物館で採用することを考えたものである。

世界のエコミュージアムは、産業革命の影響を受ける前か受けた直後の農業地域の文化を対象にすることが一般的である。博物館内に復元された現場で展示物（民具等）を見て触れたり、地元の話者から話を聞いたりできる展示方法を採用している。日常生活の作業が外で行われているから、屋外に展示物が設置されていることが多い。T.I.E.M. サイトでは、インターネットというメディアの制限があっても、できるだけ地域文化と直接ふれる機会を用意するように努めた。

そして、リビエール氏によって提唱されたエコミュージアムの理念は、常に地元の住民と連携しながら維持すべきであり、とくに博物館が社会に還元することを重要視している。この点でも、T.I.E.M. プロジェクトでは「社会還元」はもちろんのこと、地元の住民と連携しながらこのサイトを構築し、前述したように将来的にもっと住民主体の形での発展を望んでいる。

• フランスのエコミュージアムの前例

上述したように、エコミュージアムの「エコ」とは「自然環境」と「社会環境」の両側面の意味のことで、地域文化を紹介するフランスのエコミュージアムでは主に自然環境のなかでの人間の日常的な営みが展示されているが、社会（たとえば村社会）の全体像を描き出そうとする試みとして、19世紀の産業改革を境に地域社会の技術・経済・生活様式などの諸領域においてどのような地域社会の変化が起きたかという社会的変動の過程を動的に捉える展示が少なくない。この動的な社会変動の捉え方はフランスの全てのエコミュージアムで見られるわけではないが、少なくとも最新のエコミュージアムを見ると、その視点は新しい施設の共通的な特徴となっており、また成功したエコミュージアムの秘訣だと思わざるをえない。

そこには色々な理由があるが、フランスの社会科学の歴史の長さとその研究分野の新鮮な方法という理由のほかに、フランスの田舎の近代化が19世紀にさかのぼることができ、その近代化がヨーロッパの内発的な経済発展の結果であるという事情を考え合わせると、日本の田舎の劇的な近代化のスピードと比べて、フランスの田舎はより漸次的に近代化してきたために、ノスタルジックな情緒で原風景の故郷へ回帰しようとする動機が現在のフランスでは全くと言っていいほど意味をなさないのである。しかし地域社会がどのように変化してきたかという歴史の変遷（社会の変貌）を冷静に受け止めることは、多くのエコミュージアムの創設者と大多数の来館者が共有している姿勢といえる。ここでこの問題を本格的に検討する余裕はないが、少なくとも、それぞれの国で異なる形で進行してきた

近代化の経験から形成されたそれぞれの近代化の捉え方によって社会変遷への受け止め方も決定されているという事情は、各国におけるエコミュージアムの方針にも少なからぬ影響を及ぼしているということだけを述べておきたい。

まとめると、エコミュージアムのコンセプトに付すべき社会環境への関心は人間の文化を動的に捉えることでとても有意義なことだといえるが、簡単に採用できるアプローチではない。フランスでも必ずしも全てのエコミュージアムで効率よく採用されているわけではない。したがって、なおさらフランス流の「社会の博物館」としてのエコミュージアムを日本に無理やりに輸入したり当てはめたりしようとするやり方だけは避けるべきことである。以上のことを考慮に入れた上で、それでも社会変遷への関心のアプローチを T.I.E.M. サイトのケースにもっと活かしてみたいのである。

• 社会を取り上げる三つの理由

民具のエコミュージアムにおいて社会を取り上げる主な理由は三つある。

一つ目は、第一節で説明したようにヒトとモノの接点として創造された「民具」概念のなかに「社会」との関連性がすでに存在しているからということである。つまり、日本流の「民具」概念とフランス流の「エコミュージアム」概念はそもそも社会への関心において共通しているという理由である。この二つの概念をうまく組み合わせれば、未だかつてなかったミュージアムを創造できると思われる。

もう一つは先に触れた、エコミュージアムにおいて社会変遷への関心を効率よく採用することの難しさの問題と関係している。社会といっても、村社会においては一人ひとりの意思があり、価値観・個性・欲望・情熱などの様々な感情・考え方が混在する総合体であるから、なかなか博物館の展示で表し尽くせないものがある。そしてもっと扱いにくいのは、個人個人が公的な生活の傍らに私的な生活を送っているから、それを展示しようと思えば、いわゆるプライバシーの問題が生じてしまうのである。

これを考えると、民具を中心にして社会を語るというアプローチほど、便利なやり方はない。というのは、エコミュージアムにおいて民具について展示をみせることは基本的にその地域の、広い意味での「技術」をみせるという展示になり、客観的な見方で人間の経験を語るができるのである。筆者自身も只見町の民俗調査のときに感じたことであるが、地元のお爺さんやお婆さんは昔の民具や技術について話しているうちにそこから徐々に社会全般の情報も交えて教えていただいたのであるが、いきなり話者の個人的な経験や考え方を尋ねた時には、相手が少し困っているような反応を受けたことが頻繁にあった。やはり個人的な情報を教えることは容易なことではない。しかし、広い意味での技術（信仰の儀礼なども含めて）を尋ねたほうが、話しやすい情報になるのだと思った。なぜならば、民具にまつわる技術は個人が所有しているものではないからという理由によると考えることができる。

もう一つは、精神的な理由かもしれないが、人間にとって技術や民具を使って日常的な営みを行うことは些細なことでも何かを生産する行為なので、その生産や行為に対する誇りを感じる話者が多いといえる。人間が自分で行った生産的な行為に対する誇りの表われだといえる。もっと一般的に言うと、人間としてのアイデンティティが仕事を通して形成されるので、民具はその人間性の強い象徴と

なっているのである。

三つ目の理由は身体の記憶（kinesthetic memory）ということであるが、これについては簡単な説明だけにとどめる。民具の使い方は身体をもって記憶される。年配の話者の場合、昔のことを忘れていても、民具の動作は今でも鮮明に覚えているという聞き取り調査の経験を何度かしたことがある。身体の記憶は脳のなかにもっと深くインプットされているメモリーと言われているが、年配の話者に昔の社会の様子を語っていただくためには民具の動作を話の出発点や拠り所にするにはとても有効である。したがって、この側面からみても、民具を中心にしたエコミュージアムはその博物館の施設の計画や展示物の説明などを話者の記憶に基づいて用意するだけに、とても有意義だと認めなければならない。

以上の民具のエコミュージアムとして社会変遷を積極的に取り上げる三つの理由をまとめてみると、フランスでは「社会の博物館」として理解されているエコミュージアムは実際のところ、その創設や維持を実現するのは困難である。国によって多少状況が異なるだろうが、根本的に同じ方法的な問題が付きまとう。つまり、

- 一、博物館学が社会の全体像を描き出そうとすると、方法的にどのように住民の色々な経験を総合的に説明し展示できるかという問題（プライバシーの侵害はなおさらのこと）
 - 二、長年軽視されてきた「田舎」のローカルな文化を住民に積極的に語らせて、博物館学的なプロジェクトに参加してもらうことにあたっての問題（つまり住民が誇りをもって参加できる「参加型博物館」の困難な実現）
 - 三、過去の経験を語ることにあたっての記憶の問題
- ということである。これらの困難・問題は民具をたよりに社会を描き出そうとすると、多少とも乗り越えることができるのである。

•参加型ミュージアム

2010年7月17日、東京大学で行われた文化資源学会で、「文化財の情報発信——只見町インターネット・エコミュージアムを事例に——」について小松大介氏と一緒に共同発表をした。会場からは、さまざまな質問や指摘を受けた。そのなかで特に考えさせられたのは、次のようなコメントである。この只見インターネット・エコミュージアムは、民俗学の研究方法や視点に偏らずに社会学など他の研究分野の方法も導入するべきではないかという意見だった。実際、この問題は第4班のメンバーは前から意識してきたものであった。

そこで、民俗の領域を広げるもう一つの取り組みとして、中村政則先生が2006年2月4日に行ったライブ・ヒストリーの手法を取り入れた聞き取り調査を「只見町の風景」部門の中に導入してみた。それは小林地区の梁取源左衛門さんをインタビューした映像である。これからも只見町の方々の人生を記録した文章、写真、映像、録音などの資料をもっと発信できれば、只見が近代化していく過程を面白く分かりやすく提示できるものと期待している。

この取り組みは、エコミュージアムの展示内容を充実させるというだけではない。前回述べたように、エコミュージアムとして住民との連携は不可欠な条件であるから、さまざまな人生記録資料を提示・発信していくことは、展示内容を充実させることにとどまらず、参加型ミュージアムとして質的

に向上していくことは最も望ましい発展である。生業や年中行事など民俗学プロパーの典型的な関心事に限らず、常に開かれた視点をもって参加型ミュージアムの性格を維持していくべきだと思う。研究方法や博物館の方針においては、勿論いろいろな難点がある。しかし、可能ならば、大学の研究者の特権的な関心事にしないで、町民の皆さまと一緒に共有して考えていきたいものである。

• 現代民俗学の導入

すこし抽象的な話になってきたので、ここで『大倉の民俗』から二つの具体的な事例を挙げてみたいと思う。

少年時代を大倉で過ごした昭和19年生まれのNさんは、子供の頃いつも男だけでいろいろないたずらをして「新撰組の真似をして遊んでいた」と語ってくれた。その新撰組の真似ごっこは年上の子が近藤勇の主演を演じ、年齢的に二番目の子供が土方の役だったらしいのだが、戦争が終わって米国の影響により新撰組のような遊び方は暴力的だとして止めらさせられた。つまり「戦争ごっこはやめろ」という社会的なムードがあったのである。また、Nさんは、幼い頃、子供たちのグループの親分として「アンニャ」（あにき）と呼ばれたSさんの提案で、大倉で早乙女踊りを復活しようという計画に参加したそうである。旧暦の正月、踊りの練習をしたうえで、手元にあったプラスチックのヒョットコ面や笠などを被り、袋を持って、5、6件の家を回ったそうである。家の人から砂糖入りの湯をご馳走になり、お菓子やイナボ（稲の穂）餅、団子を食べきれないほどたくさんもらったので、後でどこかの家で囲炉裏を囲んで餅を焼いて食べたということである。大成功だったのだが、後に早乙女踊りをしたことが学校に知られてしまい、先生に「乞食のような行為はだめだ」と叱られた。それ以降、大倉で早乙女踊りをする人は二度と現れなかったという話を伺った。

この二つの話は、「戦争ごっこはだめ」や「ものをもらうのはだめ」という当時の価値観が強く反映した出来事であるが、その時代性がリアルな形で現れている事例としてとても興味深いと思う。このような体験を民具や行事と関連してエコミュージアムのなかに導入できれば、社会の変遷がより鮮やかに見えてくるだろう。

3 ウェブ上の博物館

• 作業工程表

このなかでとくに筆者が取り組んだ「自然と暮らし」部門の構想は、2007年の春ころ、只見町教育委員会にある民具カードのスキャン作業をしていた時に生まれた。民具カードや映像・写真といったさまざまな資料を、どうしたら一つの展示空間において統合的かつ効果的に公開できるかという課題はプロジェクトが始まって以来ずっと考えていたが、満足できる方法を見つけられずにいた。そんな折、教育委員会にあった作業工程表のフォルダーと出会った。この有効性に気づいたことで、一つの糸口を掴んだという思いであった。

作業工程表は、稲作や焼畑・狩猟・漁撈など17種類の生業の作業手順を一年間のサイクルを通して解説したものである。これは横山哲夫さんが執筆された工程表を土台にして、明和の民俗を語る会や只見町民具と語る会の方々が加筆して完成した労作で、只見町の住民たち自身が記した価値ある記録資料といえる。現在9,000点におよぶ一般民具カードと2,333点の国指定重要有形民俗文化財の民

具カードと並び、貴重な一次資料であり、また補足的な資料でもある。作業工程表が「自然と暮らし」部門にふさわしいと思った理由はいくつかある。まず、補足的資料としての重要性と、只見町の住民たちによって記録された「一次資料」としての貴重性が挙げられる。しかし、それよりも、ウェブサイト構築に困っていたわたしたちにとっては、作業工程表の採用によってすべての資料を時間軸に整理できるという大きな有効性があるからだった。とくに多数の民具カードの閲覧の面倒さを回避できる一つの方法であった。

このようにいろいろと模索したあげく、只見町の住民たちの手で作成された作業工程表は、「自然と暮らし」部門の大黒柱となった。さらに時間軸を明確にするために四季ごとに分けた四つの基本画面を設け、あらゆる種類の資料・データを閲覧できるような仕組みをつくった。作業工程表の文章には必要に応じて多少手を加えたが、できるだけ原文を残すように努力した。

• サイトの発展の可能性

現在プロトタイプとなっているこのインターネット上のエコミュージアムはこれからどのような形で発展すべきだろうか。「只見町の屋根葺職人」コーナーを特別展コーナーに変化すれば、屋根葺職人と並んでほかの常時特別展や臨時展示を追加することがいくらかでもできる。「只見町所蔵民具検索」は現在、2,333点の国指定重要文化財の民具コレクションを中心にしているが、将来的にすべての民具カード(9,000点)を展示することが可能である。また民具の検索方法をさらに工夫すれば、民具検索はより分かりやすく面白くなることを期待している。「只見町の風景」にはスポットを増やしていくことが望ましい。最後に「自然と暮らし」ではもっと写真やビデオのビジュアル的な資料を提示する必要があるであろう。

• アナログ島

紹介している内容が只見町の民具や生業、そして昭和30年代の高度経済成長期まで残っていた伝統的な生活様式全般であり、そのすべてはアナログ式の世界である。只見町インターネット・エコミュージアムは、対象としてのアナログ式の文化とメディアとしてのデジタル式のインターネットを扱っているだけに、両方の特徴を強く意識する必要があった。インターネットの性格を明確に把握し、その機能を活かすことにも苦心したが、現実と仮想現実の間で使い手に錯覚を起こさせるような3D映像などのバーチャルリアリティ(仮想現実)を軸にした空間を構築しないという基本方針を決めた。

したがって、現在のところウェブ上に掲載している資料は、民具カードのほかに、作業工程表、写真、図式、映像、文章などで、これからまたその種類が増えるかもしれないが、それらの資料を交差させることによって、只見町の人々の暮らしがパソコン画面にバーチャル的に再現されるのではなく、一人ひとりの使い手の頭のなかで認識されるような展示形態とした。

これらの基本方針のもとに作成するT.I.E.M.サイトは、デジタル世界(インターネット世界)のなかに浮かぶ一つの「アナログ島」として展開すれば、世界的な視点からみても極めて独創的なプロジェクトになるであろう。

(フレデリック・ルシーニュ)

参考文献

- 『只見町史 第3巻 民俗編』 只見町史編さん会 1993
- 『大倉の民俗——福島県南会津郡只見町大倉——』 佐野賢治編, 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2008
- 『平成19年度 只見町の教育』 只見町教育委員会 2007
- 河野通明 「「民具からの歴史学」への30年」『商経論叢』 神奈川大学経済学会 45-4号 2010
- Alexandre Delarge, “Des écomusées, retour à la définition et évolution”, *Publics & Musées*, 17. 18, 2000

Ⅲ 只見町インターネット・エコミュージアム「自然と暮らし」の開発 ——作業工程表の活用——

はじめに

2008年に終了した神奈川大学 21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」(以下, COE)において, 地域統合情報発信班は, 福島県南会津郡只見町を舞台とし, これらの豊富な資料を利用してインターネット上で, 民俗・文化などの情報発信を行う「只見町インターネット・エコミュージアム」(以下 T.I.E.M.⁽¹⁾)の開発を行った。⁽²⁾この T.I.E.M.では, 只見町の景観・民俗事象・民俗映像・民具を複合的に組み合わせることで, 研究者は勿論のこと, 只見町を知らない一般の人々, そして, 只見町内の人々にもこれまで知らなかった只見町を知ってもらうことを目的としている。

T.I.E.M.では, 四つの部門を設けている。一つ目は「只見町の風景」で, 小林地区・梁取地区の俯瞰写真から, 地区内にある儀礼や史跡等をクローズアップし, 文章と映像でそれらの概略を知ることができる。例えば, 小林集落・梁取集落でそれぞれ小正月に行われる早乙女踊りの映像を見ることができ, 隣接集落でありながらも差異があることを確認することができる。また, 只見町に伝わる昔話も映像で見ることができ, インターネット上でありながらも, その場に居合わせているような雰囲気味わうことができる。二つ目は「只見町の屋根葺職人」である。ここでは只見町で行われている生業の一つである屋根葺職人に焦点をあて, 屋根葺職人の仕事の内容から儀礼まで民具とともに説明している。この部門は博物館でいうところの特別・企画展示であり, 「只見町の俯瞰写真」では概略的な説明であったが, 一つの事柄に焦点をあて詳細な解説を交えて説明している。今後は新しいコンテンツを追加していくことで只見町をより深く理解することができるようになる。三つ目は「只見町所蔵民具検索」で, 2003年「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」⁽³⁾として国指定重要文化財に指定された2,333点の民具を検索することができる。検索方法は, 民具名, キーワード, 用途分類, 「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」で分類されている作業分類によつての検索である。そして, 得られた検索結果からその民具の民具整理カードの閲覧をすることができる。また, 一部の民具では, 高精細画像を閲覧することができるようになっており, その民具の使用痕まで詳しく見ることができる。四つ目は「自然と暮らし」である。ここでは「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に, 作業ごとに記入された作業工程表をもとに只見町で行われていた生業の四季サイクルを見せるものである。しかし, 「自然と暮らし」部門については, COEの期間内において, 時間的な問題もあり, 開発を行うことができなかった。本稿では, この「自然と暮らし」部門の開発の経緯とその元となった作業工程表について概観しながら, 今後の開発や課題について考えていきたい。

1 「自然と暮らし」部門の開発の経緯

当初、「只見町の風景」・「只見町の屋根葺職人」・「只見町所蔵民具検索」の開発は決まっていた。「只見町の風景」に使用されている写真や映像、「只見町所蔵民具検索」で閲覧できる豊富な民具資料を「只見町の屋根葺職人」のような企画展示で結びつけて理解を図ることを想定していた。しかし、「只見町の屋根葺職人」のような企画展示は、個別的な生業については詳細に説明することが可能であるが、その他の生業との係わり合いがわかりにくく、しかも、開発に時間がかかることから、それぞれの部門を結び付けつつ、只見町の生業を複合的に閲覧することができる仕組みについて模索していた。そして、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に作成された作業工程表を元に「自然と暮らし」部門を開発することを考えた。作業工程表についての詳細は、後述にゆずるが、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に作成された各生業について簡単にまとめたものである。この作業工程表を季節、生業、作業ごとに分け、映像や画像、そして、民具資料とリンクを結び、只見町の生業のサイクルや方法を分かりやすく閲覧できるように開発を行った。

2 作業工程表の利用

作業工程表は、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の資料の選定時に作成された資料である。この作業工程表は地元の方々が手書きで記入したもので、実際の経験に基づいているだけあって、研究者が気づかないような細かな点が記入されている。これらの内容は、先代、先々代から脈々と受け継がれてきたものであったり、記入者が、経験から新たに獲得した知識であったり、学校や書籍からでは学ぶことができない只見町ならではの“知恵”が含まれている。また、中には、その作業で使用する民具や作業の様子が図示されているものもある。そして、大きな特徴として、それぞれの作業における作業者のつらかったり楽しかったりといった思い出も書き記されており、経験者ではないとわからない作業の実態が記入されている。作業工程表には、ゼンマイ採り・稲作・畑作・焼畑・狩猟・漁撈・山樵・麻糸製造・マタタビ細工・屋根葺という「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」で区分された生業の他にも村普請・炭焼き・養蚕なども含まれていたが、まずは「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」をインターネット上で閲覧できるようにすることを考えたため、今回の開発からは除外した。今後、只見町民具検索等で資料が拡充されていけば、これらの開発を行っていかなくてはならないだろう。

3 作業工程表の問題点

• 文章の修正

さて、作業工程表は、当初からテキスト入力を行い、只見町インターネット・エコミュージアムで閲覧することは考えていたが、さまざまな問題があった。作業工程表は、基本的に実際に経験をしたことがある人が手書きで入力している。そのため、読みにくい部分やわかりにくい部分があった。そうした部分に対しては、実際に入力したことがある人たちへ追加調査を行い正確な情報への修正を行った。方言で書かれている箇所も多く、一般の人々が閲覧する場合、理解しにくい場合もある。そうした場合は、只見町の雰囲気を残すという方針を定め、極力、方言はそのまま残し、備考にて解説を

生業名		No. 5				
月	旬	作業名	作業の順序・内容	使用民具	民具の説明	備考
		ブシトリ	<p>こして葎の上から根莖は株で両面から合せる。おぼろい合つた莖をさき 今度は莖を横づけに結びつける(マルとる)</p> <p>更いその上は一ホコ葎を その上に二回回す マルをロける</p> <p>その上はミノガア 長い莖を一息折って マルの上をいせその上を彩る 又はトクシ根々のせ</p> <p>グシヤ葎(葎)も 針金で 結える</p> <p>この葎を結わけるため 針金が 通せないと 時はツバブシ(ブシ)で 通す場合もあり</p> <p>通した針金は 機手で叩いて しめる</p> <p>グシ(葎)の端をトビロい 彩る 根の下に つかる</p> <p>飾り物に トビ丸、キリトビ 根をとつかる</p> <p>株木は ケントウキ という</p> <p>キリトビは 葉を 結んで 束</p>		<p>マル</p> <p>葎</p> <p>トビ丸 葎をぐるぐる巻くとき 束中の 括つたのさる</p> <p>キリトビ 水で 葎の 束の 束を 束にする</p>	<p>手は葉の 束を 束にする</p>

写真1 作業工程表

行うようにしている。また、作業工程表には、読点が打たれていない場合があり、文節によっては意図する意味とは違う意味として捉えられてしまう危険性があった。そのため、適宜、読点の追加を行っている。

• 作業工程表の再構成

作業工程表は、基本的に作業手順に沿って時系列に記入されているが、畑作に関しては、品種別に記入されている。これを作業別に再構成してしまうと、品種別のサイクルが読みづらくなってしまうため、現状の品種別の記入の方が読みやすいと考え、作業別ではなく品種別に並んでいる。例えば、収穫を見ると、春には冬菜があり、夏には馬鈴薯等があり、秋には葱等があるといった具合に、作業も一様ではなく品種別の収穫方法の記述が含まれている。作業別に再構成した場合、一つの作業の中に多数の品種を並列することになり、煩雑になってしまうことが考えられる。一方で、漁労は、作業別に構成されているが、同じ作業名でも、魚種によっては季節がずれており、捕獲方法に少なからず差異が見られるため、魚種別の記入の方が読みやすいと考え、魚種別に再構成している。両者とも、同じ作業名を与えられた作業という観点からは作業別に並べた方が見やすいと言えるが、内容や時期の違う作業を同じ作業名でまとめてしまうことが、果たして本当に理解しやすい配置なのかは今後の検討課題の一つである。

• 季節の感覚

作業工程表には、年間を通した作業が記入されている。しかし、実際には、その作業だけを行っているわけではなく、それぞれの作業の合間をぬって他の作業が行われている。「自然と暮らし」では、それぞれの季節にどのような作業が行われているかを示し、只見町での生業サイクルが理解でき

るような形を目指した。同じ季節にどれだけの作業を行っているかをわかりやすく説明するために春夏秋冬に分け、それぞれの季節に行われる作業を振り分けていった。しかし、一般的な季節感では、3～5月が春、6～8月が夏、9～11月が秋、12～2月が冬となるが、只見町では、生業毎に季節感が異なっていることが確認された。畑作ではその年の最後の収穫物となる11月初旬の大根の収穫が終ると冬と認識している人がいれば、逆に漁撈では11月末に行われるハヤを獲るために行われるイシグラを秋の作業として認識している。このため、季節の変わり目に行われる作業については追加調査を行い、その調査結果を元に作業が行われる季節を分けている。そうすることで、只見町における生業ごとの季節感を「自然と暮らし」で閲覧することは可能になったが、同じ時期に行われる作業を見る場合は、季節の境目で双方の季節に分けて配置せざるを得なくなっており、その目的を果たせなくなっており、春夏秋冬という季節ごとの配置の仕方を含め、もう一度検討する必要がある。

例)	ツル細工	マタタビ採取		11月～12月	→ 冬
	漁撈	ハヤ獲り	イシグラ	11月末	→ 秋

• 語彙の表記

同じ民俗語彙や民具名であっても、カタカナだけで表記している場合、漢字で表記している場合、送り仮名が違う場合、記入者によって漢字が分かれる場合など、その表記の仕方が様々ではない。書物などから字として伝えられた民具名や民俗語彙も少なからず存在するが、基本的には、日常の会話の中で使用される言葉が音として人から人へと口伝えされてきた言葉である。追加調査を行った際に、カナで表記されている語彙の漢字表記の確認を行ったが、親や仲間から言葉として伝えられているので漢字表記はわからない、もしくは、こういう漢字表記ではないかという推測の域を脱しえない語彙が多く存在していた。そのため、漢字表記は音として記憶された言葉を再解釈して漢字に当てはめていった結果であり、民具名や民俗語彙を表記するためにはふさわしくないものと考え、作業工程表では、民俗語彙や民具名はカタカナで表記することに定めた。しかし、カタカナ表記だけではイメージにくい民具名や民俗語彙でも、漢字で表記することで閲覧者のイメージを助ける手段となる。そのため、作業工程表では、あくまで参考として、カタカナ表記の後に漢字表記による民俗語彙や民具名を使用している。

• 只見町所蔵民具検索とのリンク

作業工程表では、そこに記述されている民具名と只見町所蔵民具検索をリンクで結び、民具名を選択することで、只見町所蔵民具検索を呼び出し、同じ民具のリストを表示し、それぞれの民具を選択することで、より詳細な情報を提供できるように考えた。只見町所蔵民具検索を開発した際にも苦労した点であるが、同一民具でも名称が違う場合、一方の民具名で検索した際にはその民具名がつけられた民具を検索結果として表示できるが、別の名称がつけられた同一民具は検索結果に表示されないことが想定された。これを解決するため、民具名が分かれる場合、仮項目として統一的な名称をつけ、⁽⁴⁾ 違う民具名であっても双方の民具が検索結果として表示するようにしている。さらに、作業工程表では同一民具であっても、只見町所蔵民具検索に登録されていない名称が含まれており、このまま

では、作業工程表と只見町所蔵民具検索とのリンクを結ぶことが難しくなってしまう。只見町所蔵民具検索も作業工程表も、実際の調査結果に基づいて得られているデータであるため、どちらかを変更することは、調査結果の改竄に他ならない。そこで、作業工程表に記述される民具名をそのまま残し、カタカナによる民具名、〈 〉 付きの漢字ひらがなによる民具名の後ろに [] を付け、民具データベースにおける民具名を記入している。

例) 作業工程表の民具名と只見町所蔵民具検索の民具名が同一の場合

ヒラグワ 〈平鋏〉

① ②

①…………カタカナによる民具名

②…………漢字ひらがなによる民具名

下線…………只見町所蔵民具検索内の民具名

作業工程表の民具名が只見町所蔵民具検索に登録されていない場合

コエアゲシャク 〈肥上杓〉 [コエビシャク]

① ② ③

①…………カタカナによる民具名

②…………漢字ひらがなによる民具名

③…………民具データベースに登録されている民具名

下線…………只見町所蔵民具検索内の民具名

4 「自然と暮らし」における作業工程表

作業工程表の各生業に記述されている作業を季節ごとに振り分け、それを只見町の自然環境をモデルとした図に示した(写真2)。行動主体となる人を中心に、山、屋内、耕地、川というそれぞれの環境を矢印で示したそれぞれの生業で結んだ。写真2では、春には、山樵、狩猟、ゼンマイ採り、漁撈、稲作、畑作、麻糸製造、屋根葺という生業が行われており、夏には、山樵、狩猟、ゼンマイ採

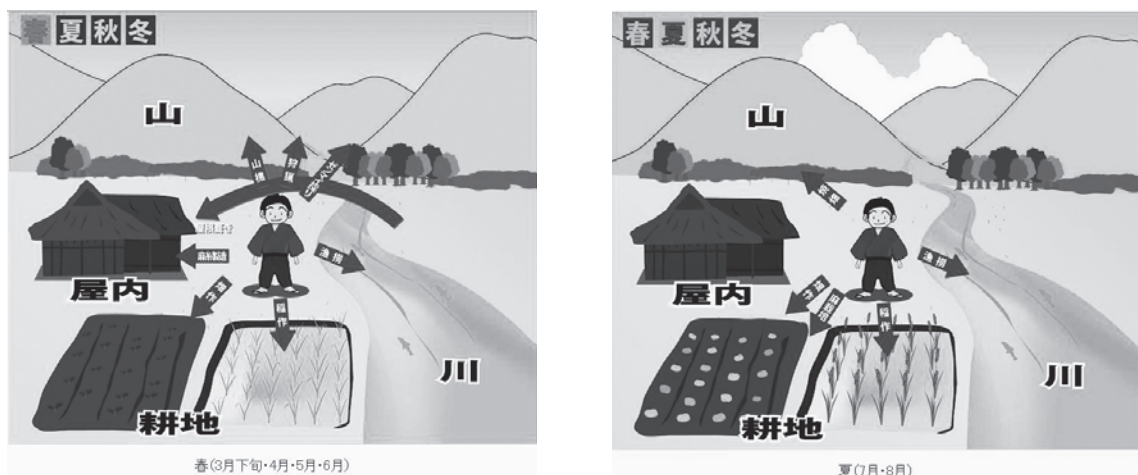


写真2 左は「自然と暮らし」の春の場面。右は「自然と暮らし」の夏の場面。

り、麻糸製造、屋根葺の矢印が消え、焼畑、麻栽培の矢印が現れるようになっていく。それぞれの季節を見ていけば、どの季節にどれだけの生業を行っているのかを見ることができるようになっている。

次にそれぞれの生業の矢印を選択するとその季節に行われる作業がリストになって現れる。写真3は春の生業である屋根葺を選択し、現れた作業の中からグシトリを選択した場面である。この作業を選択すると、右側にさらにリストが現れ、その作業に使用する民具が表示される。また、右端には、作業工程表に記述された該当の作業の解説が表示されるようになっている。ここでは、同じ季節内に



写真3 各生業に現れる作業を選択すると作業工程表に記述された解説が現れる。

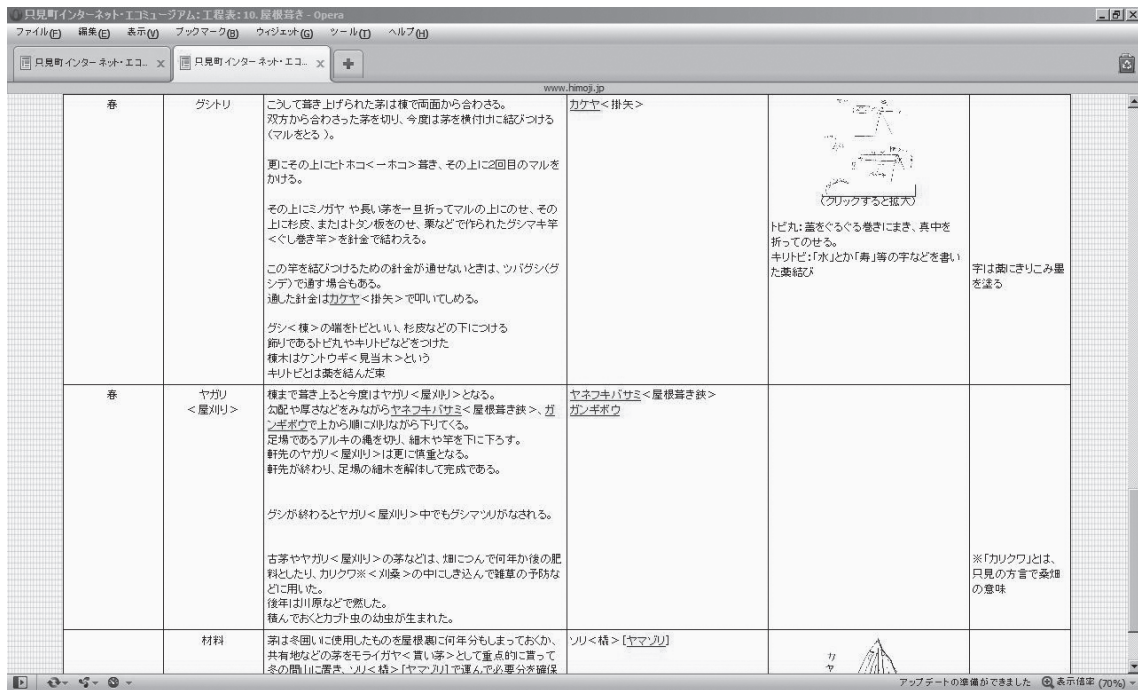


写真4 作業工程表

行われる生業を理解することは可能であるが、その生業における一年の流れについては理解しにくい。そうした場合には、右端に現れた作業の解説の右下に現れる「工程表表示」ボタンを押すことによって、その生業の作業工程表が該当の作業を中心に表示される。

「工程表表示」ボタンを押すと、別ウィンドウが立ち上がり、作業工程表が表示される（写真4）。作業工程表は、今回扱った「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」で区分されたゼンマイ採り・稲作・畑作・焼畑・狩猟・漁撈・山樵・麻糸製造・マタタビ細工・屋根葺の生業ごとに用意されており、それぞれ選択した作業を中心に表示されるようになっている。前述の通り、作業工程表はそれぞれの作業が時系列に並んでおり、特殊な場合を除いて順序を入れ替えていないため、これをスクロールすることで、その前後に行われる作業や、その生業の年間サイクルを理解できるようになっている。作業工程表に記入されている絵に関しても、スキャンをして取り込むことで、閲覧できるようになっている。また、作業工程表に記述されている民具に関しては、青字下線を施し、それを選択することで只見町所蔵民具検索を呼び出し、選択した民具の一覧や民具カードを閲覧することができるようになっている。

おわりに

以上のように作業工程表の問題点と、実際に開発された「自然と暮らし」における作業工程表を見てきた。作業工程表を取り扱う際に、一番苦慮した点は、作業工程表に描かれている只見町の民俗文化をなるべく損なわない形でインターネット上に閲覧できる状態にすることである。本来であれば、作業工程表の手書きで記述されている原資料をそのまま閲覧することが、もっともふさわしい形であろう。しかし、正確な情報の伝達や関連する情報との結びつきができなければ、インターネット上で閲覧させる意味はないと考え、今回のような形となった。

方針を定めて扱ってきた作業工程表であるが、語彙、季節、他部門との結びつきなど、様々な問題が浮上した。その都度、話し合いを重ね解決策を協議してきたが、サーバーへアップロードした後も問題点や改良点が次々と上がってきている。例えば、現在、作業工程表に記述されている方言については、方言に※印をつけ、備考欄でその詳細な意味をつけているが、閲覧者の画面サイズによっては、作業工程表が一画面に収まらず、備考欄が画面外になってしまうことが考えられる。方言が記述されている部分でその意味が理解できることが一番ふさわしい形であり、例えば、方言が記述されている部分にカーソルをあてることで、その意味がポップアップすることができれば、非常に見やすい形になるであろう。また、作業工程表の構成についても改良の余地がある。現在は、基本的に、記述されている通りに作業が並んでいる状態である。生業によっては、十数ページにも渡るものもあり、年間サイクルを理解する上では非常に見づらい構成である。これを一つのページで見せることができないかと模索しており、一つの案としては、作業を円グラフに配列することで年間サイクルを見せることである。そこから作業工程表や他部門とリンクを結べれば、さらに理解を助けることになる。しかし、細かく記述された作業を円グラフに配列することは、スペース的に見づらくなってしまっても考えられる。

作業工程表を記述した方々にとっては、勿論、只見町内に住み、そこで行ってきた生業を記入した資料であるが、記入していただいていない方々も、それぞれ自分が体験してきた民俗というものを持

っている。只見町インターネット・エコミュージアムをさらに発展させるには、自分が体験してきた事柄を集積する場を設け、只見町の人々とともに協力していかなくてはならない。

今回行った開発が到達点ではなく、今後の開発への出発点と考え、さらに只見町の民俗文化を理解しやすい形に開発していかなくてはならないだろう。(小松大介)

参考文献

- (1) 只見町インターネット・エコミュージアム (<http://www.himoji.jp/himoji/tadami-item/>)
- (2) 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第4班編『地域情報学の構築——新しい知のイノベーションへの道——』神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議 2008
- (3) 只見町教育委員会『会津只見の生産用具と仕事着コレクション』2005
- (4) (1)に同じ。小松大介『福島県南会津郡只見町の民具のデータベース化とその問題点』p 39

IV オリジナルオントロジーを用いた民具のデータベース化

はじめに

近年における情報化社会の発達により、大量の情報が電子化されている。神奈川大学の21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」⁽¹⁾では、非文字資料の共有、流通を目指している。非文字資料とは既存のメディアでは表現が困難な、匂いや景観、感触などを指す。そしてこれらの情報を処理するために知的処理の必要性が高まってきた⁽²⁾。

本研究が対象とする非文字資料は民俗文化をベースとしている民具である。そのため同じ対象を指し示す場合でも、地域や年代によって表現に相違が生じる。したがって、非文字資料の情報共有・情報流通には情報資源に関する情報、すなわち、メタデータを用いた意味情報検索が求められる。本稿では民俗資料の一つである民具を例にとり、民具データベースにオントロジーを導入することによる有効性を示していく。

1 民具カード

民具とは、民衆によって作られ、長い間使用されてきた道具や器物の総称である。

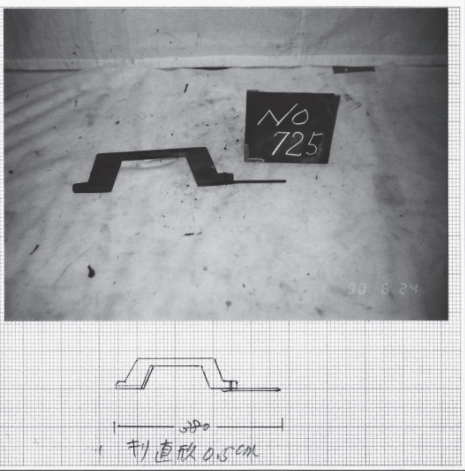
ここで取り上げる民具カードは、福島県只見町に残されている民具情報を記録したカードであり、民具を実際に使用した人が直接カードに記録するという点で、学術的な研究対象としても評価が高く、只見方式と呼ばれ国の有形文化財に指定されている⁽³⁾。

民具の写真、民具名や通し番号、寄贈借用年月日、使用目的、備考などが記載されている。

しかし、民具カードに記載する際の書式は特に指定されていないため、内容は同じでも民具カードの製作者ごとに異なる書式がなされている場合が多い。例を挙げると「ヨツメギリ」という民具があるが、「ヨツメギリ」や「(ヨツメ)ギリ」と書かれている場合があり、キリの使用目的に「木に穴をあける」、「物に穴をあける」など表記にばらつきがみられる。このままデータベースに起こすと、検索を行うときに検索漏れなどの不具合が発生してしまう。

民俗資料調査カード

通番号 T・(A)・M 725 分類番号 28116-1

資料名 (地方名) マルキリモミ (標準名)	写真・形状・寸法等
寄贈・借用 年月日 昭和・平成 年 月 日	
寄贈者 (住所) 只見町大字 字 番地	
所有者 (氏名)	
材質 木 針は金	
使用年代 明大 年頃から 明大 年頃まで・現在も使用中	
使用目的 木に穴をあける道具	
取蔵場所 旧朝日公民館	
備考	
調査年月日 平成 2年 6月 23日	
調査員	

只見町教育委員会

図1 マルキリモミの民具カード

2 データベース

そこでデータベースの項目をオントロジーで体系化、関連性を明確にし、只見民具カードを使ったデータベースを構築する。オントロジーを導入したデータベースは、通常のデータベースでは検索漏れしてしまう情報を検索することが可能になる。また、今まで気づかなかった民具間同士の新たな関連性の発見にもつながる。

G	H	I	J	K
寄贈者所有者	氏名	材質	使用年代	使用目的
なし	なし	木、針は金	なし	木に穴をあける
石伏	堀金主計	木、金	なし	木に穴をあける
荒井原	目黒唯夫	木、鉄	なし	物に穴をあける
荒井原	目黒唯夫	木、鉄	なし	物に穴をあける
豊取	長谷川友一	なし	なし	木や板に穴をあける
只見字新屋敷	菅家次正	木、鉄	なし	木材に穴をあける
只見字新屋敷	菅家次正	木、鉄	なし	手でもんで穴をあける大工用具
只見字新屋敷	菅家次正	木、鉄	なし	木材に穴をあける大工用具
只見字新屋敷	菅家次正	木、鉄	なし	木材に穴をあける大工用具
只見字新屋敷	菅家次正	木、鉄	なし	木材に穴をあける大工用具
黒告	菅家刃吾郎	金	なし	大工道具
只見字	新国茂之	木、鉄	なし	木材の表面を荒削りする道具
なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	鉄	なし	気を割る大工用具
なし	なし	なし	なし	なし
大倉字	吉津巧	木、金	なし	木材を削る大工道具
なし	なし	なし	なし	なし
黒谷字	舟木千一	鉄	なし	木材を削る
なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	鉄、雑木	なし	屋根の削りに使った
なし	なし	なし	なし	なし
なし	なし	鉄、雑木	なし	屋根の削りに使った

図2 只見町民具カードのリレーショナルデータベース

3 オントロジー

オントロジーとは本来哲学用語であり、「存在に関する体系的な理論（存在論）」という意味である。情報工学の立場からは「概念化の明示的な記述」と定義される。

オントロジーとは共通語彙（概念）を提供する体系化された辞書のようなものである。オントロジーの最も基本的な利用法として、オントロジーで定義された概念を、知識を表すための共通の語彙

（概念）として利用するという形態がある。オントロジーを導入することにより、文書がただの単語の集まりではなく、文書全体で意味を持ったデータとして扱われる。

これにより、本当に必要な情報を文章ではなく、意味としての確に検索することが可能となる。

本研究では民具名と使用目的についてオントロジー構築を行った。

オントロジーを構成する要素として以下の要素が挙げられる。

is-a 関係……下位概念 B と上位概念 A の間には「B is-a A」という関係が成立する。

part-of 関係……ある概念と、その概念を構成している部分に当たる概念との間の全体一部分関係を表す。

attribute-of 関係……ある概念を構成している属性情報（色、形状等）を表す。

instance-of 関係……概念とその具体例との間の関係を表す。

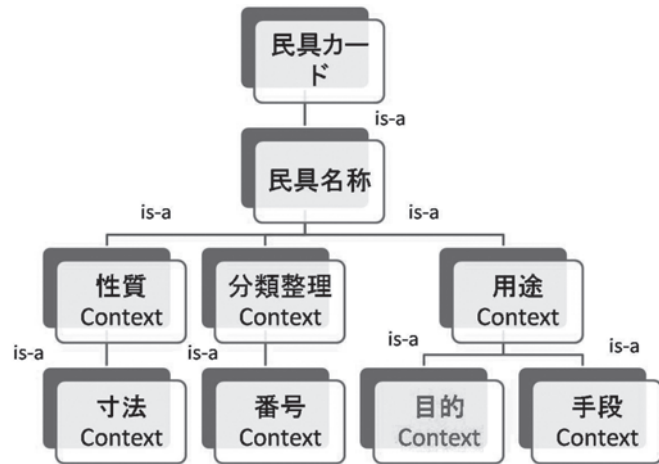


図3 民具カードのオントロジー構造図

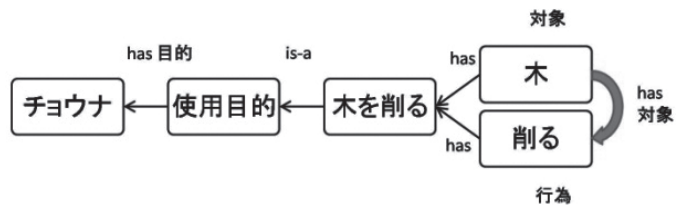


図4 使用目的のオントロジー構造図

4 オリジナルオントロジー

本研究では民具専用のオリジナルオントロジーを構築し使用する。

既存のオントロジーに比べ構築の自由度が高い、専門的な知識を必要としないなどの利点が存在する。

現在では各民具の使用目的ごとに木材加工や金属加工など、上位概念ごとに民具を分けている。

5 評価方法

オントロジーを使用しない従来のデータベースとオントロジーを用いたデータベースで検索を行い、検索結果から評価を行う。

表1 リレーショナルデータベースとオントロジーデータベースでの検索件数

	リレーショナル精度	リレーショナル再現	オントロジー精度	オントロジー再現
キリ	0.8	0.25	0.941176471	1
ヤスリ	1	1	0.75	1
戦争	1	0.096774	0.885714286	1

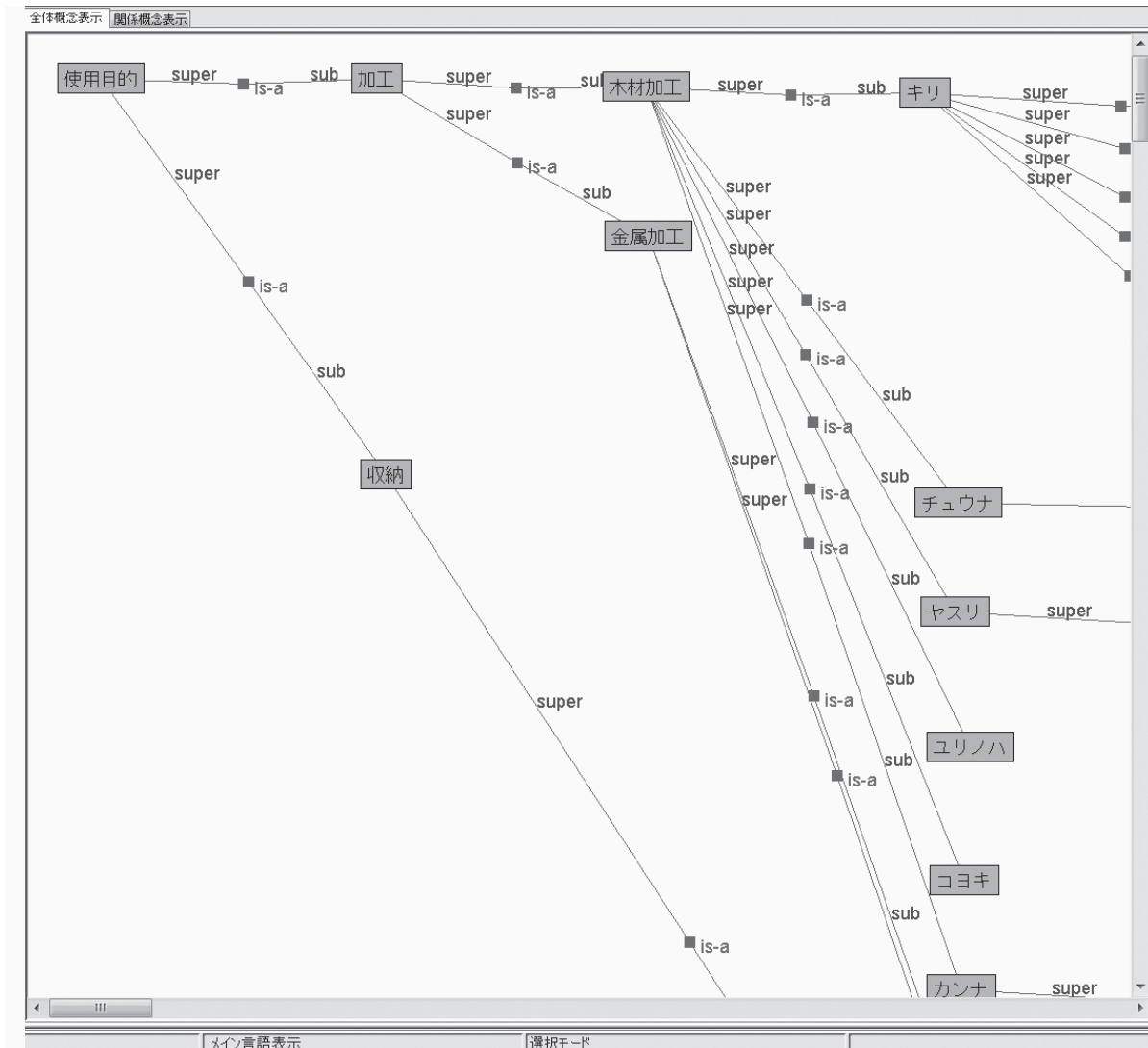


図5 使用目的のオリジナルオントロジー構造⁽⁴⁾

リレーショナルデータベースは「キリ」で検索したときにミツメギリやボートギリ、「戦争」のときにボウクウズキンやショウイダンなどの関連性が高い民具が検索できなかった。

一方オントロジーデータベースの方は上記に挙げた検索は可能だったが、本来戦争とは関係ないセイエンノズ（製塩の図）が検索されているなど、関連性がない民具も検索されるミスがあった。

おわりに

本研究では只見民具カードのオントロジーデータベースを構築し、その有効性を示した。

今後の計画としては、民具カードの備考欄や、他の民具カードのオントロジー構造化を行う。

また民具名と使用目的から、オントロジーを自動で構築するシステムの開発を目指す。

（木下宏揚・佐藤俊輔・鈴木一弘・松澤和光）

参考文献

- (1) 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム人類文化研究のための非文字資料の体系化” <http://www.himoji.jp/>
- (2) 木下慶子 村上敦志 稲積泰宏 木下宏揚 森住哲也：“Context 間の関連性を表現するメタ Ontology

——民俗学研究のための情報発信——” 情報処理学会研究報告, じんもんこん研究会, pp.1-6, (2006-1)

Meta-Ontology that express the content to relation of between

(3) 福島県只見町公式ホームページ <http://www.tadami.gr.jp/>

(4) 大阪大学科学研究所第1研究部門(情報・量子科学系)知識システム研究分野(溝口研究室)

おわりに——民具から“mingu”研究へ——

昨年2010年12月, 日本常民文化研究所を拠点とする国際常民文化研究機構の国際シンポジウム「モノ語り——民具・物質文化からみる人類文化」が開催された。その折, 只見町の民具を事例に佐々木長生氏が「民具名称のなりたち——奥会津只見の事例から——」と題して発表, フランスのフランソワ・シゴ氏は, 「人と道具」のセッションで「道具と身体技法」を取り上げ, その中で事前に只見町民具を実見した印象を踏まえ民具研究の国際的な比較の重要性に言及された。

シンポジウムでは, 民具名称をめぐる学術資料化・国際標準化の可能性, 民具と身体の関係性, モノに託され, 表された人々の意識・民俗技術, モノの変化に伴う生活の変化について検討されたが, 民具の名称と形態と機能について具体的事例が縦横に論じられ, 中国人研究者による物質文化と非物質文化遺産との関係性の最新の話題の提供, 種まきと身体技法の関係性はじめ, 同じ櫓や櫓を同じ人間が状況に応じてどのように使い分けているかといった実践論などが披露された。民具名称の問題は, 認識論まで含む幅広い論議が必要だが, シンポジウムでは具体例, 個別論から一般論への方向性が見えてきた。

民具の調査・研究の意義については, すでに中国民俗学会公式ホームページ上で周星氏が只見町の事例を挙げ, 紹介している。帰国したシゴ氏は, 日本の民具研究のあり方に刺激を受けたことと, 日本の民具を紹介する研究会をフランスやヨーロッパで開催する必要があることを伝えてきた。民具は, “mingu”として国際的に有効性を持つ日本発の学問研究として発信できるのである。

今回は只見町の事例を紹介したが, インターネット・エコミュージアムは日本の民具研究を国際的な mingu 研究として展開する際に大きな役割を果たすことが期待されるのである。(佐野賢治)